

日本人が知るべき親日の歴史（第2回）

インドネシア

株式会社せおん代表取締役
株式会社テイク・グッド・ケア代表取締役

越 純一郎



親日国インドネシアと日本の歴史こそ、日本人が親日国と日本との関係史について、きちんと学ぶべきであることを教えてくれる。

日本による植民地支配からの解放

インドネシアの親日の源流は、同国を350年にもわたって支配したオランダを日本が打ち破って、植民地支配を終了させたことにさかのぼる。

日本軍は、軟禁されていたスカルノやハッタ等の民族主義活動家を解放し、禁止されていた「インドネシア」という呼称も解禁、またインドネシア語が初めて公用語となり、大学教育にも導入された。

インドネシアの覚醒と日本

日本の軍政における、官憲の地元市民への暴力や、苦しい戦況による食糧配給の不十分などが、今も庶民の記憶に残っていることは、証言集等が伝えている。日本の軍政に対する反乱蜂起もあった。

しかし、それでも親日家が多いのは、日本の勇戦を見たインドネシアの人々が「アジア人は劣っていない」、「自分たちにも独立する力がある」と自信を持ち、更に、日本軍政下で、インドネシアの人民が「戦う精神」を獲得したためであった。

独立宣言をラジオ放送したユスフ・ロノディプロ氏（後に各国大使を歴任）は、「日本だけがアジアを支配する白人に立ち向かった。真珠湾攻撃をアジア人として誇らしく思い、自分自身の中の強さを感じた。アジアは劣っていないと思った」と語っている（資料A：P. 70）。

インドネシアでは小学校から高校まで全ての歴史教科書で、インドネシア独立のためにいかに日本が貢献したかを良く説明している。国民諸氏は自然に日本に対する尊敬と感謝の念を抱くようだ。また、日本の軍政が残した「教育システム」「軍事組織」「行

政機構」が独立後の同国を支えたと教えている。

日本がオランダを打ち破っていなかったら「インドネシアの独立は遅れた」「独立は不可能だった」という声は今も非常に多い（資料A：P70, 136, 198, 262）。

日本将兵も一緒に戦った独立戦争

1943年、日本軍の協力の下にインドネシア人の指揮官が率いる民族軍「郷土防衛義勇軍（PETA）」が組織され、それは独立戦争の戦力の中核となった。

その独立戦争では、多量の日本の武器が使われ、しかも数千人の旧日本兵と一緒に戦い、その多くは今も同国各地の英雄墓地で眠っているのだ。これは日本人として忘れてたくない。彼らは、インドネシア独立のために突撃したのだ、インドネシア独立義勇軍を叱咤、鼓舞しながら。

21世紀を迎えても、インドネシアの新聞各紙、特に『ジャカルタ・ポスト』は、独立戦争に参加した日本の将兵に関する記事を、毎年、掲載している（資料A：P. 236）。

東京の青松寺には、スカルノ大統領が独立戦争に参加した日本人2名に贈った記念碑があり、「市來龍夫君と住吉留五郎君へ 独立は一民族のものならず全人類のものなり スカルノ」と刻まれている。

独立戦争を共に戦った旧日本兵のうち約1000人はその後も現地にとどまり、うち数百人はスカルノ大統領の頃にインドネシア国籍を与えられている。同国の女性と家庭を築いた方々も多い。ちなみに、戦時中にインドネシアから日本に留学した南方特別留学生等の多くも、日本人女性と結婚されている。

日本の年号で刻まれた

インドネシア独立記念日

日本の敗戦の直後、8月17日の朝、スカルノは独立宣言を読み上げた。スカルノ（初代大統領）と

ハッタ（初代副大統領）が署名した独立宣言の日付は「05年8月17日」。この「05」とは「皇紀2605年」のことである。

つまり、インドネシア独立記念日は、日本の年号で刻まれたのである。これは、忘れてはならない。

今日、ジャカルタのムルデカ広場（＝独立広場）に立つ、独立戦争の国民的英雄 スディルマン将軍の銅像の台座に刻まれた独立記念日の年号も同じだ。

2011年、同じスディルマン将軍の像がプルノモ・インドネシア国防大臣より日本に寄贈され、東京裁判が行われた建物をにらみつける場所に置かれた。独立記念日にそこで行われる献花式には、駐日インドネシア大使は、最も忙しい日であるのにもかかわらず、自ら参加されている。

バリ島の父 三浦 襄

植民地時代の1930年よりバリで事業を営んでいた三浦襄は、開戦後、アジア解放の理想のために海軍民生部顧問となり、軍と住民の問題にとりくんだ。

人を愛し正義を貫く人であった三浦は、敗戦の翌月、日本が約束していたインドネシア独立を果たせなかったことを詫びて自決した。「私の魂はこの国で生き続け、独立を見守る」と言い残した三浦襄は、今日も「パパ・バリ（バリ島の父）」と呼ばれている。

バリの英雄墓地にも、独立戦争で没した多くの日本兵の墓があり、いつも綺麗に清掃されている。「訪れるたびに、日本人として誰かのために命懸けで戦った先人達を誇りに思う」と現地の日本人は語る。

今日の懸念(1) インドネシア人への敬意

かつて日本には、興亜主義という活動・思想があった。例えば、明治の指導者を動かした興亜主義者 杉山茂丸を祖父とし、アジア解放の理想のため資金調達に努めた杉山泰道を父とする杉山龍丸は、インド・パンジャブ州の飢餓救済を使命と思い定め、「インド緑化の父」と呼ばれるに至った（渡辺利夫『台湾を築いた明治の日本人』P.53）。先人の偉業である。

我々の先人たちにはアジアの方々への思いがあり、対等、平等、相互尊敬の基礎があったのだ。

戦時中に南方特別留学生等として日本で学んだインドネシアの方々からも、「私たちは敬意をもって扱われた」、「非常に良い歓迎を受けた」、「差別などなかった」、「嫌な思いなどしたことはなかった」などの発言が多い。（資料C：P.50, 56, 62など。もち

ろん逆の発言もある。）

翻って現在はどうか。今日の我々は、インドネシアの皆さんに然るべく敬意をもって接しているだろうか。相手を理解する努力は十分か。同国の歴史と思いを理解しているか。

率直なところ、筆者の周辺には残念な事例も多い。上から目線の日本人もいる。恥ずかしいことだ。

インドネシアの方々と接する駐在員も教師も公務員もどなたも、両国間の歴史を学び、日本への思いも理解し、対等に尊敬をもって臨むべきだ。それは、日本の矜持と文化度の問題であるだけでなく、日本の国益にも関わるのだ。

今日の懸念(2) 産業面、中国

1970年代の東南アジアで、日本の経済進出による深刻な摩擦があったが、インドネシアでは、今日、その影響は残っていない。現在、インドネシアの日本企業数は約1,500社で、タイの7,000社とは大差がある。それは、課題だと認識するべきかもしれない。

インドネシアの最大の貿易相手国は中国で、日本は2番目ながら中国の約4割だ。資金面を梃子に、侵食するが如くに進出する中国は多くの親日国でも活動を活発化しているが、インドネシアも例外ではなく、新幹線計画では日本は敗れた。だが、現在、多くのインドネシア人は、中国を選んだのは過ちだったと考えている。

一方、日本企業の努力と円借款で昨年開業したジャカルタの地下鉄は、定時運行率ほぼ100%（！）で毎日10万人を運び、経済発展と渋滞解消に大いなる貢献をもたらした。これは、日本の好感度を高めている。

このように、新しい時代には新しい努力によって、意味ある友好の歴史を重ねていかねばならない。

インドネシアの多くの方の心には、日本がある。日本人も両国史を大切に考えるべきだ。

尚、本稿全体について、インドネシア人実業家アリ・ウィドド氏に貴重な助言／情報を頂いたことを、ここに記して感謝したい。

参考資料

- A：桜の花出版編集部『インドネシアの人々が証言する日本軍政の真実』2006
- B：インドネシア国立文書館（倉沢愛子・北野正徳訳）『ふたつの紅白旗ーインドネシア人が語る日本占領時代』1996
- C：倉沢愛子編著『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』1997
- D：長 洋弘『バリに死す』2015